う．芽鱗のはがれ方，枝の伸び方，葉のひろがり方，樹皮のはがれ方，葉の落ち方と，言われなれば見過ごしてしまうことがらが取り上げられている．花を見て名前を調べるだけが観察ではないことを，理解してもらうのによい本である． （金井弘夫）

□坂崎信之ほか：**日本で育つ熱帯花木植栽事典** 1,211 pp. 1998. アボック社. ¥59,000.

公園や花屋の店先の色どりが増したのは，花の万博以来のことだろうか．種苗の入手が以前より容易になり，折からのガーデニングブームも手伝って，植栽についての新しい知識の普及が望まれるときに，時宜をえた刊行物である．扱われている花木は294属2,236種類に及ぶ．まず約700頁（厚さにして半分）にわたるカラー写真と植物画で，それらが学名順に紹介される．続く300頁が事典篇で，同じ順序で特性や栽培について簡単な記述があり，品種についてはくわしく取り上げられている．とりわけわが国における植栽可能地域（後出）について，日本地図上に図示すると共に，各地での越冬の実績や花期についての記述がある．概説篇では花木の故郷である熱帯各地の環境と，植栽上の留意点が簡単に記されたうえ，植栽可能地域についてのくわしい説明がある．植栽可能地域（Hardiness Zone）は，米国農務省が年最低気温を基準にして植栽適温地帯を定義したもので，本書では各2区分をもつ3地帯が，ランタナ・ゾーン，デイコ・ゾーンなど，それらに代表的な植物名で名付けられている．わが国の Hardiness Zone の設定はこれが初めてのことではない．林弥栄・小形研三（1990）樹木アートブックⅠ（アボック社）で，本書の著書坂崎と輿水肇によって，日本全国の気温記録，高度，経緯度のデータを処理して，8地帯12地区のクライメートゾーンが定義されている．これらのゾーンは植栽を目的として定義されたものであるが，自然分布を論ずる際にも参考とする価値は十分認められる．巻末に花木の導入年表，熱帯花木のみられる世界各地の植物園の紹介，各種の索引がついている．

（金井弘夫）

□酒井治孝（編）：**ヒマラヤの自然誌** 292 pp. 1997. 東海大学出版会. ¥2,000.

九州大学の市民公開講座をもとに，専門の異なる16人が執筆している．トピックは地質，気象，氷河，植生と利用，サルとヤク，水資源，災害，台所事情，健康，民族問題と多岐にわたって，今日的問題が語られている．地質構造を示すのに，食パンとハムとチーズと海苔とピーナッツを重ねた口絵のカラー写真が，なんとなく中をのぞいてみたい気を起こさせる．内容は統計表や図解を使ったかなり高度なものである．登山と観光トレッキングそれに NGO 花盛りのヒマラヤについて，もう少し広い予備知識と問題意識を得たい人におすすめする． （金井弘夫）

□吉田忠生：**新日本海藻誌** 25 + 1222pp. 1998. 内田老鶴圃. ¥46,000 + 税.

岡村金太郎先生の「日本海藻誌」の出版が1936年であるので，60有余年を経て増補改訂版ともいうべき「新日本海藻誌」の刊行である．扱われる種は「岡村：海藻誌」より約400多く，緑藻綱230種，褐藻綱308種，紅藻綱838種の計約1,375種に及ぶ．なおプランクトン性海産藻類は扱っていない．学名に関する命名上の規約を解説した凡例に始まり，綱の解説，目の検索；目の解説，科の検索；科の解説，属の検索；属の解説，種の検索，そして種の解説へと続く．各綱，目，科，属には命名者名，創設年，記載文のページが記され，また目，科，属にはそれぞれタイプ科，タイプ属，およびタイプ種の名が記される．属名がどのような意味をもつかについても解説がある．種の記述では，種名，著者名，記載年，記載ページ，和名，シノニムと続き，さらにこれまでに引用された主要な文献が挙げられ，また必要に応じて図の挿入がある．続いて種の特徴の記述，タイプ産地，タイプ標本の保存場所，地理的分布と続き，わかっているものについては深さの分布が記述される．また分類上問題のあるものについては解説が加えられる．文献は1997年までのものが67ページに亘って詳細に引用される．「岡村：海藻誌」以後に記録された種類も含め，日本産の全海藻を網羅するので，本書は海藻の同定